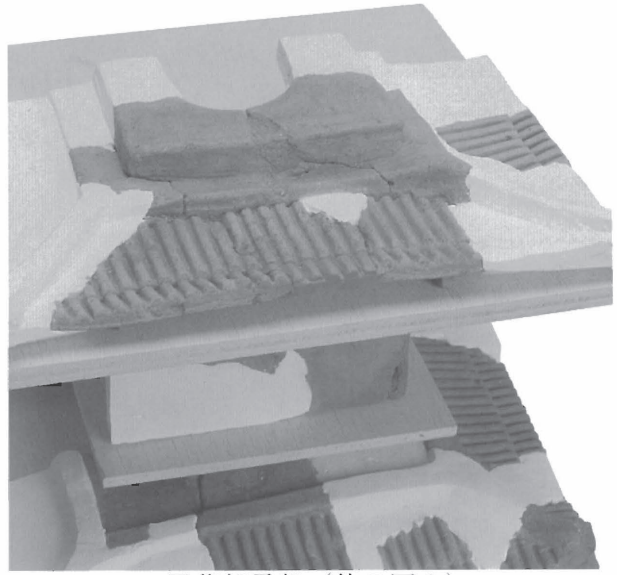
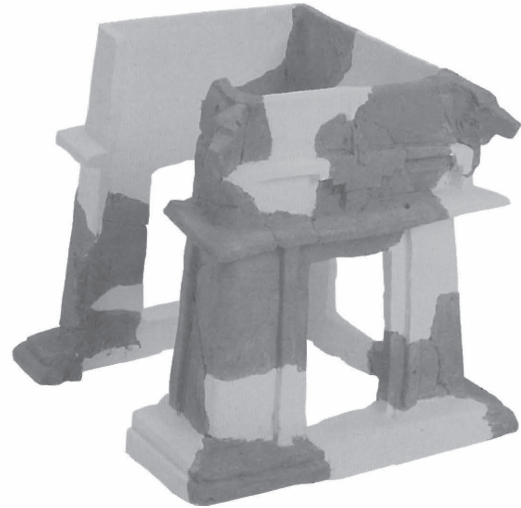




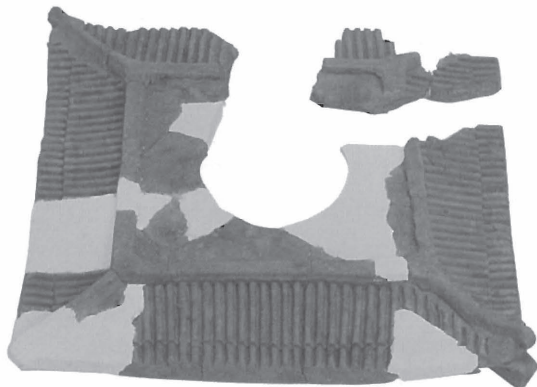
馬込遺跡出土瓦塔



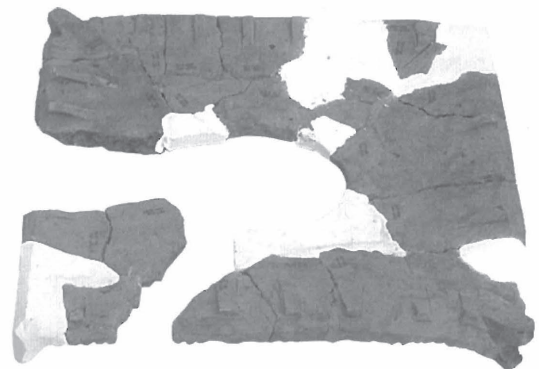
屋蓋部露盤 (第5図3)



初軸 (第6図4)



屋蓋部 (第4図1表)



屋蓋部 (第4図1裏)

印西市馬込遺跡の瓦塔について

沖松 信隆

1. はじめに

馬込遺跡は、印西市平岡字馬込に所在し、千葉県企業庁の平岡自然公園建設に先立って、平成9年6月から断続的に発掘調査が行われている。本遺跡は、旧石器時代から近世にいたる複合遺跡で、縄文時代中・後期の集落や中世の障子堀状の囲いなど、興味深い資料が発見されている。今回は、その中でも、奈良・平安時代の瓦塔について紹介する。

馬込遺跡は、利根川の分流によって開析された支谷に面する標高約30mの台地上に立地している。周辺には、縄文時代中期の天神台遺跡や7世紀末頃建立の木下別所廃寺がある。(第1図)



第1図 遺跡の位置 (1/50,000)

- 1 馬込遺跡 2 天神台遺跡 3 木下別所廃寺

瓦塔を出土した遺跡は、千葉県内では40遺跡に達し、関東地方のなかでは埼玉・群馬両県に次ぐ量であろう。

ただ、資料数のわりには破片が圧倒的に多く、全体像を復元可能な資料は千葉市谷津遺跡例などごく一部に限られていた。近年では、木更津市小谷遺跡や光町新台遺跡などで良好な資料が発見されている²。馬込遺跡の瓦塔も、遺存状況は極めて良好で、今後の基準資料のひとつとなり得るものと考えられる。そこで、本報告に先立って紹介することにした。

なお、将来的に追加の破片を回収する可能性もあるため、実物資料の復元は最低限度にとどめてある。遺物写真は、資料を十分に検討する前の段階で応急的に復元したもので、部材の組み合わせなどは現在の想定と異なっている。

2. 遺物の出土状況

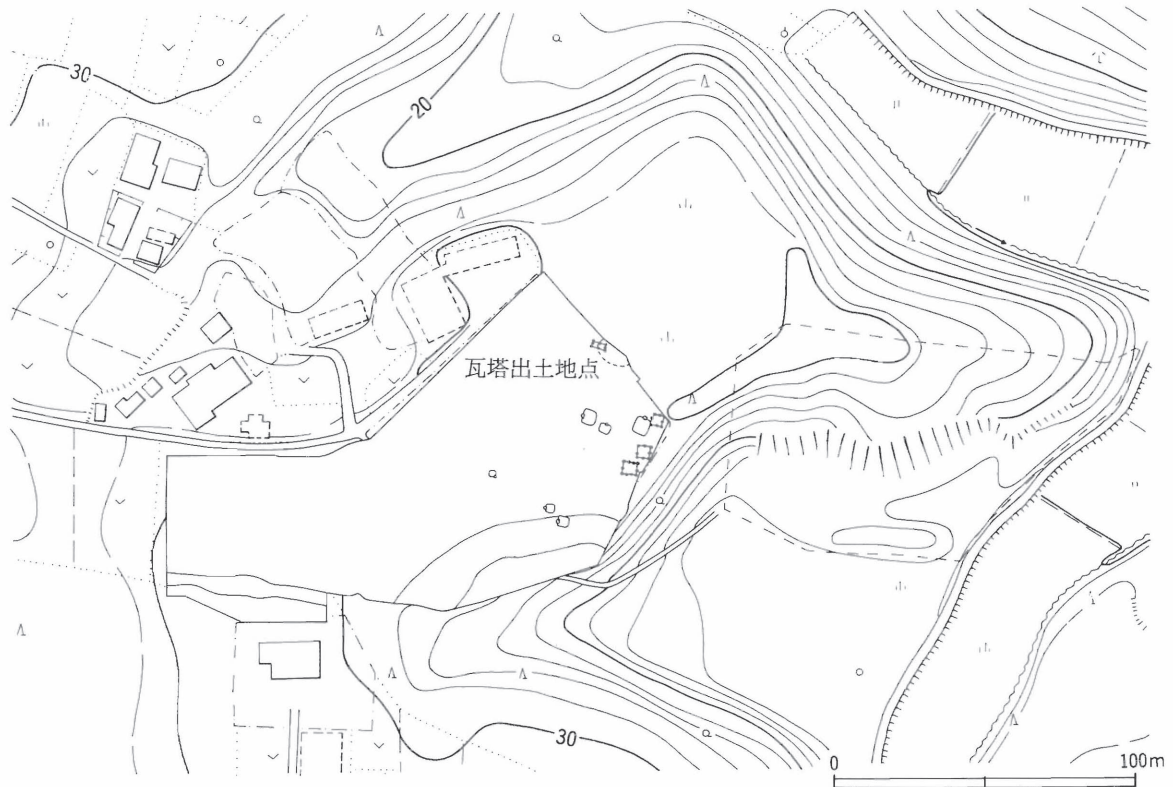
平成9年度の調査において、遺跡北東部の台地上で奈良・平安時代の集落が検出された。構成は竪穴住居跡6軒と掘立柱建物跡4棟から成る。これらの遺構群は概ね台地縁辺寄りに分布しているが、ここからやや離れた台地中央部で、遺物包含層中から多量の瓦塔片が検出された。(第2図)

第2図の破線範囲が瓦塔の集中範囲で、その外側のグリッドでも少量ながら出土している。ドットィングで採集した遺物は200点ほどであるが、周辺のグリッド一括採集の分も合わせると総数は500点にのぼる。共伴する遺物としては土師器の杯1点と鉄鉢形土器1点が出土しているのみで、時期特定は困難である。集落の時期は、出土土器から8世紀後半とみられるが、瓦塔はこの集落に伴うものか定かではない。なお、集中範囲に重なる地点に、瓦塔片を1点検出した掘立柱建物跡があるが、柱穴配置を見ると堂宇的な建物とは考えられず、検出状況からも瓦塔との関係は弱いと考える。

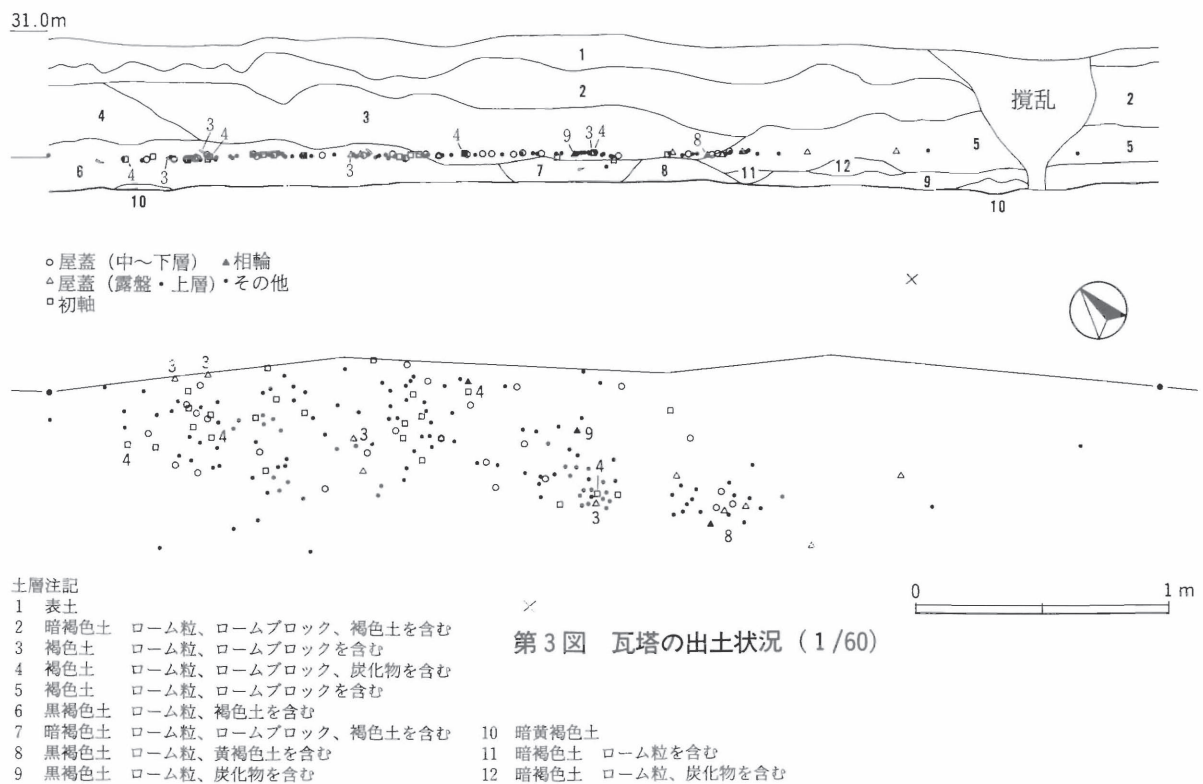
第3図にドットィングで採集した遺物の分布範囲を示した。第2図で示した範囲のさらに内側となる。これが分布範囲のすべてではないので断定はできないが、隣接グリッドでの出土点数は極端に減少することから、概ね南北方向の帯状範囲に分布していたと考えられよう。従って調査範囲の外側にも遺物の分布が予想される。

次に部材ごとの分布状況を見てみると、北側に初軸部と屋蓋の中層ないし下層破片が多くみられ、南側には相輪や屋蓋上層破片が偏る傾向が指摘できる。これは、安置してあった瓦塔が北側から南側に向かって倒壊した状況を示していると考えられる。

出土層位は、遺構確認面直上に堆積した黒色土の上面付近である。断面図のとおり、各遺物の出土レベルに差はほとんどみられない。隣接する遺物間では5cm前後の範囲に収まってしまう。このことから、遺物の出土レベルが当時の旧地表面を反映していると思われる。



第2図 奈良・平安時代遺構配置図 (1/2,500)



第3図 瓦塔の出土状況 (1/60)

3. 出土資料の内容

今回出土した瓦塔は土師質で、焼成の違いから屋蓋部で2種、初軸部で2種が認められる。相輪は、伏鉢が2点出土したことから2種と考えられるが、焼成の異なるものは含まれない。

出土した瓦塔の構成を部材別にみると、最も破片数の多い屋蓋部をはじめ、初軸部と他の軸部、相輪の一部から成る。相輪は、伏鉢・水煙・宝珠を検出したが、九輪とみられる破片は確認できなかった。屋蓋部には、露盤表現を持つものも含まれる。胎土には、微量の白色針状物や赤色スコリアなどが含まれ、なかでも角閃石が特徴的に見られる。

次に、各部材の特徴をみている。屋蓋部は、屋根瓦として工具の押し引きによる丸瓦のみを表現している。瓦の継ぎ目は軒先寄りに一節設けられている。裏側の垂木面では、削り出しにより比較的幅の狭い垂木を表現している。

焼成具合の違いから2種に大別できる。仮に焼成良好な方をA類、他方をB類とする。A類の色調は概ね赤褐色をしたものが多く、6層分が含まれる。また、なかでも特に焼成の堅緻な個体をA'として細分することができる。A'には第4図1を含む2点が確認される。垂木の表現技法の特徴として、垂木の幅を狭く作出する傾向が強く、上層の破片では幅の狭い垂木が卓越する。垂木の幅は、中層のものでは、下端部の幅が6mm～7mmで、厚みは3mmである。上層のものほど厚みが薄くなっていくが、幅が狭いので平板な感じは受けない。幅の広い垂木を特徴とする東山遺跡例とは、印象がかなり異なっている。

1は中層以下と考えられる屋蓋である。外形は27cmで、屋蓋の部材としては最も残りが良い。幅6mm・深さ3mmの半裁竹管状工具による押し引きで、幅5mmの丸瓦を表現している。瓦の継ぎ目から軒先までの長さは12mm～14mmである。垂木の幅は9mm～15mmで、垂木間隔も15mm～29mmと、あまり統一性がない。厚みは3mm～4mmでほぼ一定している。

垂木は、粘土板を削り出すことによって表現しており、その際に設定線として引いたとみられる沈線の痕跡をよく観察できる。内外面ともに、薄黒い斑文が見られる。

次に、B類は3種に細分することができる。仮にa・b・c種とする。a種は焼成不良な個体群で、色調はにぶい黄褐色を呈している。主に上層片から成り、露盤を含む3層分が確認できる。

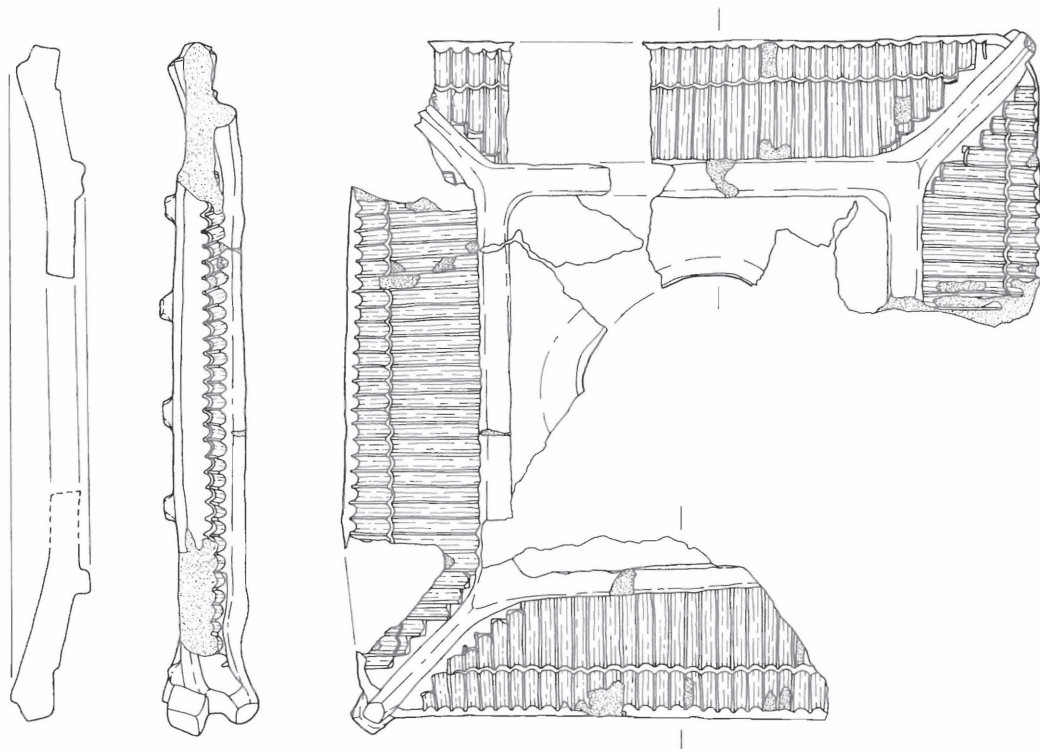
b種は、B類のなかでは比較的焼成良好で、かつ細身の瓦を特徴とする一群である。色調は橙色ないし明黄褐色である。下層から上層までを含み、3～4層分あるものとみられる。第5図2はb種に相当する個体であるが、焼成はやや不良である。外形は29cmあり、下層片と思われる。丸瓦の幅は4mmで、深さは3.5mmある。計測値では僅かな差しか読み取れないが、見た目では他の屋蓋片の瓦と比べて、かなり細身の印象を与える。垂木面には垂木設定線の痕跡は見られない。垂木削り出し後にさらにヘラ削りを行っている。垂木の幅は10mm～11mmで、垂木間隔は16mm～約22mmである。

a種にもb種にも含まれない一群をc種として一括する。焼成具合は、不良のものも比較的良好的なものもあるが、色調・質感などから明らかにa種やb種とは異なる。第5図3はc種に含まれる屋蓋片で、露盤表現を持つ。色調は橙色で、焼成は比較的良好的である。外形寸は定かではないが、推定で24cm程度に見込まれる。露盤の部分は、一辺の長さ11cmで、厚みは1.2mm前後である。瓦は、幅5mmで深さは3mmである。垂木は、幅9mm～12mmで、3.5mm～6mmの厚みがある。先端部での幅はおよそ7mm以下となっている。垂木の間隔は、18mm～24mmとばらつきがある。垂木設定線の痕跡は明瞭には残っていない。

屋蓋の階層を推定する上で、垂木の幅と間隔を指標とした。下の階層のものほど幅が広く間隔は狭い傾向にある。露盤表現をもつ3は、垂木の幅が狭くて規模自体も小さい。垂木間隔の計測値にはかなりばらつきがあるので単純に比較はできないが、3は全体としては間隔の広い傾向があると言えよう。よって、最上層にあたる3は、下の階層とは逆の様相を呈していることが検証できた。

初軸部にも2種類が認められる。焼成は屋蓋ほどの差はないが、斗拱表現に違いがみられる。4は焼成のやや不良な個体で、色調は橙色ないし明赤褐色を呈する。壁体上端部には変色して灰色の部分がある。高さ23cmの方三間で、一辺23～24cmの二重基壇を持つ。基壇には赤彩の痕跡が残る。壁体は粘土板整形により、四隅で接合したあと、主に指頭によるナデで接合痕を処理している。

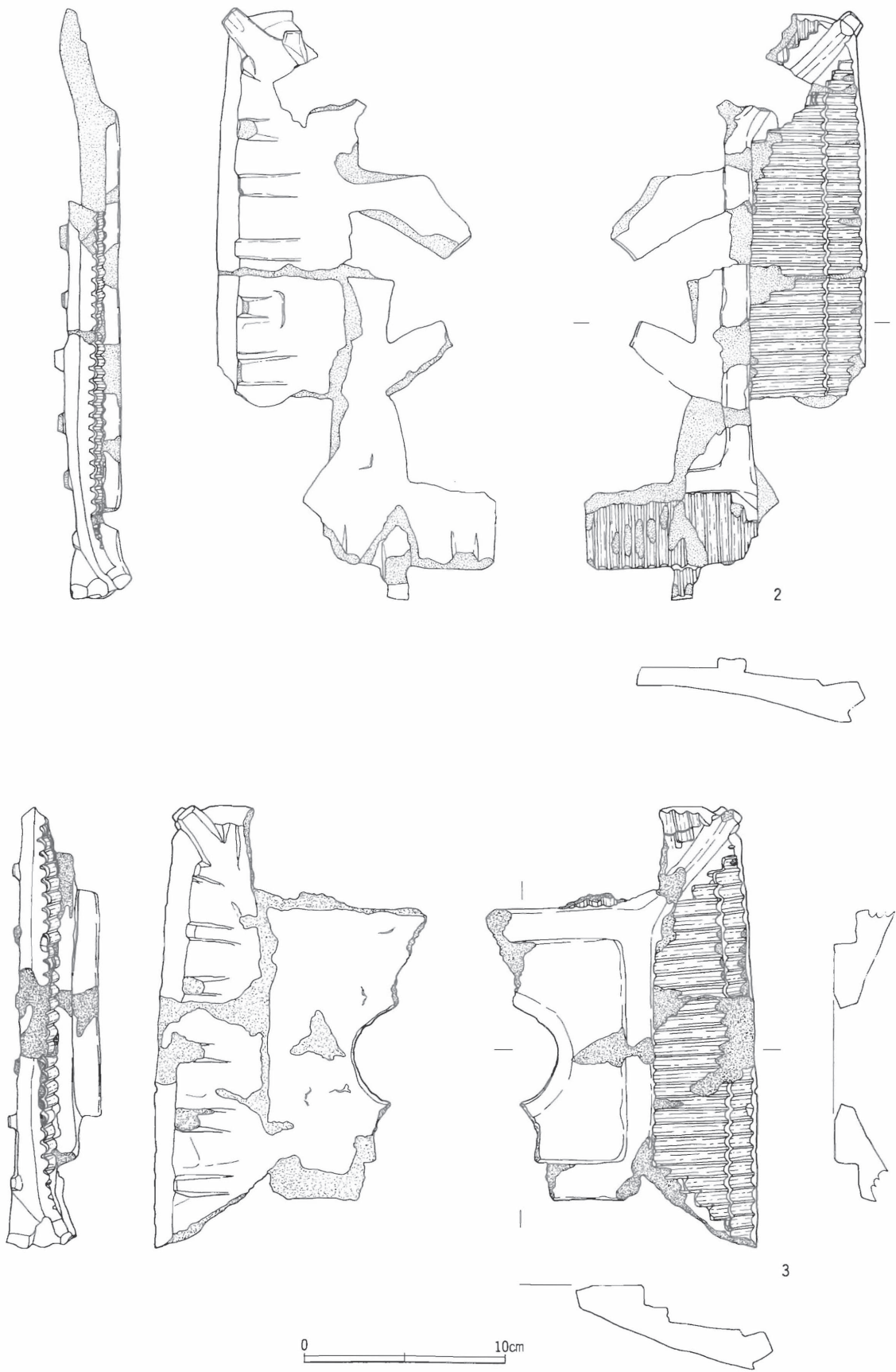
四方に入り口が開いており、その上下にあたる基壇上部と台輪には軸ずりの穴が穿たれている。台輪側のは貫通孔である。台輪の上には、壁付き三斗と通肘木を表現した「斗拱粘土帯」³がみられる。これと台輪の間に、別粘土で大斗らしきものを表現し



1

0 10cm

第4図 出土遺物(1) (1/3)



第5図 出土遺物(2) (1/3)

ている。斗拱粘土帯の最上部は通肘木として各粘土帯を連結する。その上には粘土板の切り出しによる持ち送りがあり、壁体上部から伸びる尾垂木状の斜め張り出しと接する。斗拱は、入り口脇の柱の延長上ではなく、中心部分と隅に配置されている。

もう一方の個体では斗拱の配置が異なり、柱の延長上にひとつずつ設けてある。焼成は良好であるが、壁体の遺存率が低い。

二軸以上の軸部では、壁体上端部の張り出しを成形する技法や持ち送りの形態に2例が認められる。5は明赤褐色で、高さ6.6cm、一辺約6cmの軸部である。壁体の中央に持ち送りを持つことから、方2間の構造であろう。壁体上端部を外側に折り返すことで、初軸と同様な尾垂木状の斜め張り出しを表現しているものとみられる。持ち送りの形態は、初軸より簡略化されて台形状である。5と同種の個体は2～3層分が認められる。

6の軸部は高さ約3cmで、色調は5と同じである。壁体上端部の張り出しは、粘土帯の貼り付けによる。持ち送りの形態は5と若干異なり、山形の形状を呈している。6と同種の個体は8層分が認められる。

二軸以上の軸部には、焼成や色調に明瞭な違いがみられないため、上述した壁体の張り出しの技法と持ち送りの形態の組み合わせが、個体差を反映していると判断した。

7～9は相輪の部材である。7は宝珠で、竜車と一体成形である。色調は明赤褐色で、ロクロ成形の後に粘土紐を巻きつけている。8は伏鉢である。橙色を呈し、ロクロ成形を行っている。9は水煙で、粘土板を貼り合わせている。ロクロ成形の痕跡も認められる。透かしはなく、ヘラによるキザミを施している。色調は明赤褐色を呈する。

4. おわりに

以上、出土資料の概略と、一部についての観察所見を述べてきた。これまでの内容を整理すると、まず個体の弁別については、焼成の違いなどから屋蓋部で5個体、初軸部で2個体が確認された。さらに二軸以上の軸部では、表現技法の違いから2個体を区別した。相輪は、伏鉢が2点確認されているものの、個体の区別は困難であった。

本資料についてはこれまで、断片的な紹介のなかで塔2個体と想定してきた⁴。整理作業を進めた現時点でも、露盤が2体あることなどから、塔が2個体あるのはほぼ確実とみられる。そしてさらに数個体以上が含

まれることがわかってきた。屋蓋の階層は、恐らく五重を基本としていると考えられる。また、瓦堂についても、存在する可能性は残されている。

本資料の年代的な位置付けは、池田敏宏氏の屋蓋部編年⁵によれば、瓦表現・垂木表現ともに、埼玉県東山遺跡の瓦塔と同様の手法を用いており、8世紀末～9世紀前葉の「東山類型」に比定できるらしい⁶。ただ、垂木表現に関して、筆者が東山遺跡の資料を実見した限りでは、かなり幅広く薄手に仕上げられており、馬込遺跡例を同一の手法と解釈するには無理があるように思われる。

一方、高崎光司氏の斗拱部編年によれば、これも東山遺跡に近い位置付けができると考える。東山例よりは若干簡略化が進んでいるかもしれないが、大斗が残っている点、持ち送りの切り出しも表現されている点から、明らかに谷津遺跡例よりは古い様相を呈している。高崎氏は東山例を9世紀前葉に比定している⁷。

二つの編年法に照らした限りでは、本資料は概ね9世紀前葉に位置付けられよう。ただし共伴する土器からは年代決定が困難なため、確実な年代はおさえられない。しかし少なくとも、8世紀後半までは遡らないものと思われる。

最後に、小稿を記すにあたって池田敏宏氏には馬込遺跡の瓦塔を整理していく上でのご指導・ご助言を頂いた。また東山遺跡の資料実見にあたっては、埼玉県立歴史資料館の山本修康氏に便宜をはかっていただいた。感謝の意を表したい。

注1) 県内瓦塔出土遺跡の集成については、千葉県文化財センター 1997『研究紀要18 古代仏教遺跡の諸問題』、笹生 衛 1998「古代集落と仏教信仰」『仏のすまう空間』上高津貝塚ふるさと歴史の広場などを参考にされたい。

2) 木更津市教育委員会 1998『大畑台遺跡群発掘調査報告書III-小谷遺跡-』、東総文化財センター 1999『年報4 (平成9年度)』

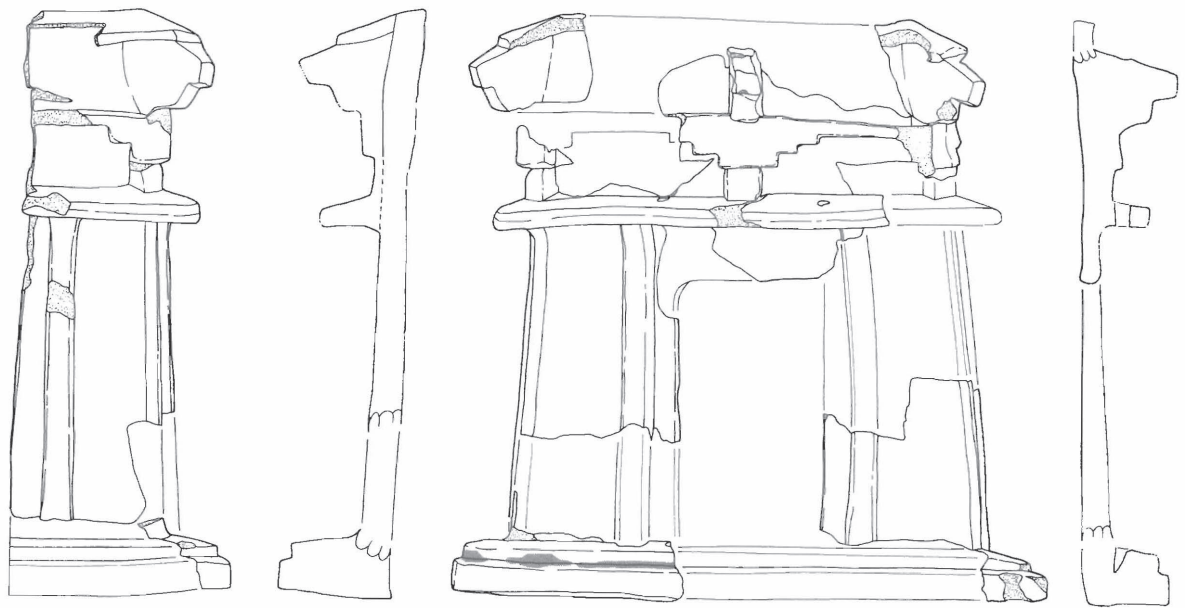
3) 高崎光司 1989「瓦塔小考」『考古学雑誌』74-3

4) 千葉県文化財センター 1999『年報No.23-平成9年度』ほか

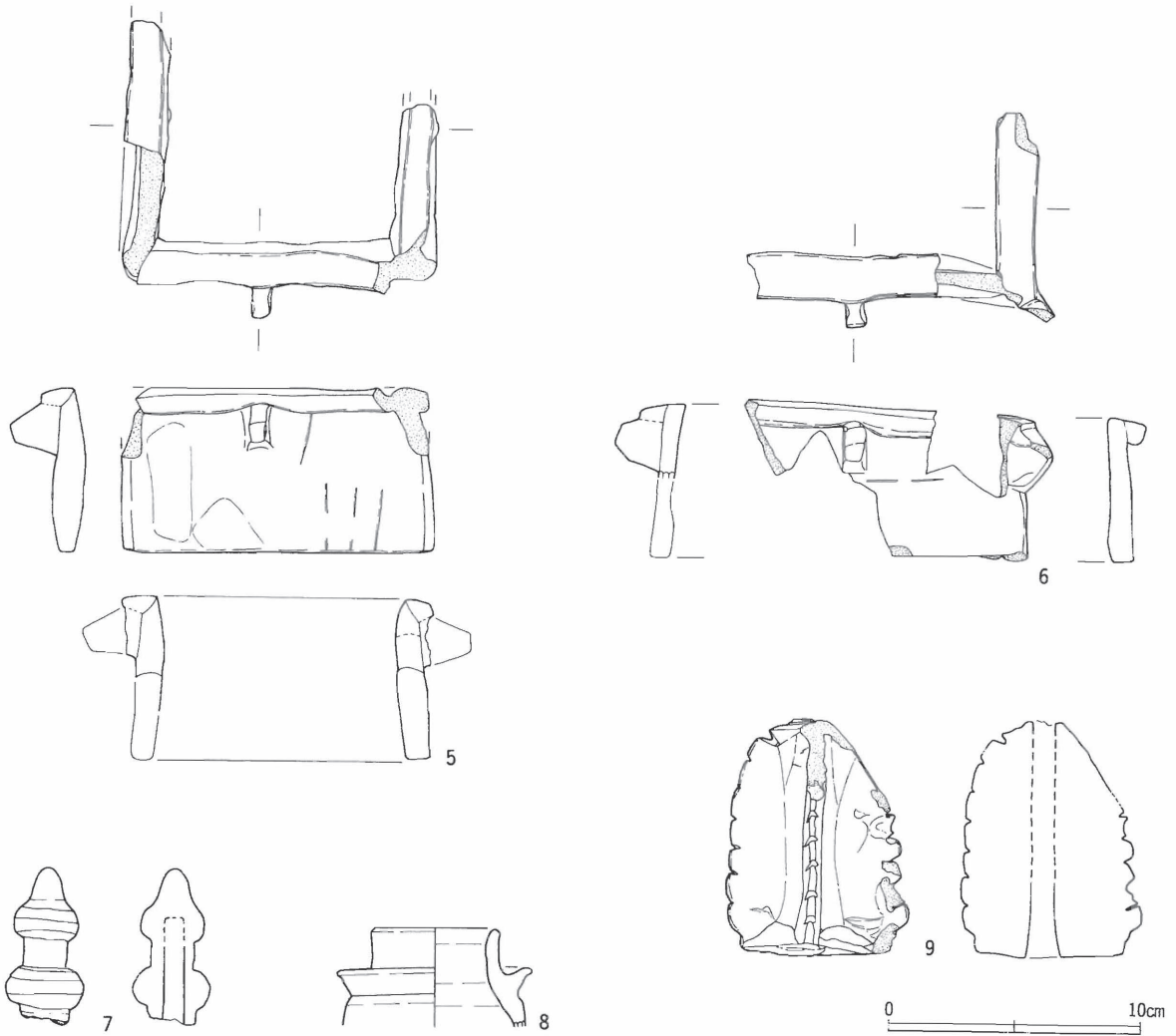
5) 池田敏宏 1999「関東地方瓦塔編年と他地域瓦塔編年の比較・検討」『研究紀要 第7号』栃木県文化振興事業団 埋蔵文化財センター ほか

6) 平成10年度に、池田氏に資料を実見していただいた折りの所見による。

7) 注3文献



スクリーントーンは赤彩残存範囲



第6図 出土遺物(3) (1/3)